

文語口語に思うこと 奥田七羊

川本千栄『キマイラ文語』の読書会が今年二月に東京神田で開かれた。短歌で使われている文語は、古語と近代語をミックスした「キマイラ文語」である。キマイラとはライオンの頭と山羊の胴体、蛇の尻尾を持つギリシア神話の怪物だ。現代の「文語」は色々なものの寄せ集め、ニセモノの文語であって、短歌総合誌の特集にあるような、文語vs口語の構図も無意味なのだと言川本は言う。「キマイラ文語」という命名も秀逸であるし、私も純粋な文語などというものは存在せず、文語と口語の線引きは不要であると考え。川本千栄の主張に賛成なのであるが、読書会ではなぜか参加者の議論が空回りするような印象を受けた。

その原因は、短歌は文語でなければならないとする権威が存在しないことに起因するのではないか。川本も言うように短歌の口語化は明治期の和歌革新運動期から始まった。前衛短歌以後の歌人たちはも口語表現の導入には積極的だった。たとえば思い浮かぶのは岡井隆だろう。口語と文語を一首の中に取り入れる試みを大胆に行ったのは佐佐木幸綱だ。馬場あき子も口語と文語を融合させる文体を確立した。そうした先人たちの様々な表現領域の開拓の結果、ライトヴァースが生まれた。中でも広く読者を獲得した俵万智も、また文語と口語のミックス型だ。現代短歌を牽引してきた歌人に文語オンリーを奨励、強要する歌人はいないのである。

一方、現代歌壇のなかに完全口語を目指す歌人は若手を中心に

一定数存在する。短歌が今後、完全に口語化するかどうか、これは短歌の根幹に係わるかなり大きな問題だ。短歌が伝統詩であることと深く関係しているからだ。口語短歌において本歌取りや序詞、枕詞など、過去の作品との連携や技法の継承は可能なのか。

伝統を切り捨てる方向に進めば短歌はやがて痩せ細るだろう。口語短歌で韻律の緊張をいかに保つか、それも課題だ。また口語短歌にとつて地方言語はどう位置付けられるのか。古来、日本において祈りの言葉が話し言葉になったことはなかった。短歌にとつても宗教性の問題は残らないのか。口語短歌が向き合うべき課題は山積している。

では伝統が有難いものなのか。私はまったくそんなことは考えていない。うっかり取り込まれないように厳しく対峙すべきものだと思っている。そのあたりは『佐佐木幸綱の世界12』（もしくは国文社現代歌人文庫『佐佐木幸綱歌集』）所収の「人食いの遺産」を読んでいただけたら、正確にわかってもらえると思う。

ここからは余談になる。私は鯉江良二という陶芸家が好きだ。二〇二〇年に他界されたが、お元気だったころは恵那の工房によくお邪魔した。鯉江良二の口癖は「鼻くそ丸めて抹茶茶碗」。陶芸家は茶碗といえば高い値段を付けたがるが、彼は他の器とさほど変わらない値段で売っていた。茶碗を馬鹿にしていたのかといえば、その逆で鯉江良二の茶碗の高台は見事なものだった。伝世の名碗を知らなければこんな削りができるはずはない。彼は伝統を知り、それと馴れ合いの関係を結ばなかったのだ。文語口語に係わらず、短歌についても私は同じことを思う。